

心臓術後、大血管術後患者の日常生活動作の拡大に向けた目標を共に設定して

病棟 5 階 B 田村麻梨子、武田愛

はじめに

A 病棟では、成人後天性心疾患を中心として虚血性心疾患、心臓弁膜症、胸部や腹部大動脈、末梢血管など様々な手術を受ける患者が入院している。現在、A 病棟では心臓術後、大血管術後（以下、術後と略す）の患者が術後集中治療室から A 病棟へ転棟してきた際に、術後の日常生活動作の拡大に向けた目標を設定している。術後に立案された NANDA-I 看護診断の領域 4：活動/休息、類 4：循環/呼吸反応、診断概念：活動耐性低下の成果指標に活動耐性：最適な活動レベルを維持あるいはそのレベルに到着するを立案し、段階的に目標を達成できるように尺度設定を行っている。そして、その目標を達成できるように清潔、活動などの看護介入を行っている。その目標に向けて看護師間で統一した介入はできていたが、患者への目標の意識付けが十分に行えていなかったと感じている。富田は、「患者の意向を聞きながら全身状態をアセスメントし、患者とともに計画を立てた。その結果に沿って、少しずつ進め、評価日には目標達成することができた。」¹⁾と、ケーススタディをして報告している。今回、A 病棟術後の患者を対象とした場合、どのような結果が導き出されるか検討したいと考えた。また、患者と共に目標を設定すれば患者の意欲も向上し、明確な目的ができることにより、スムーズに術後の日常生活動作の拡大が望めるのではないかと考え、この研究を行うに至った。

I. 研究方法

1. 調査対象：研究期間内に A 病棟に入院している術後患者 11 名
2. 調査方法：量的記述研究デザイン
 - 1) 調査対象者に研究の目的、方法について説明し研究協力の同意を得たのちアンケート調査を実施する。
 - 2) 術後患者の A 病棟転棟後 1 週間から退院までの期間で、設定した目標についての独自のアンケートを行う。
 - 3) 後方視的にカルテの日常生活動作の状況を調査する。
3. 調査期間：平成 25 年 9 月 1 日～11 月 30 日
4. 分析方法：

項目について単純集計を行い、クロス集計を行った。
5. 倫理的配慮：研究への参加は患者の自由意思により決められるものとし、同意を得られた後でも同意の撤回は可能と説明した。この研究を辞退した場合でも、患者に最善の医療と看護を提供し、不利益が生じないこと、研究中に得られた情報は研究以外に使用することはないこと、無記名で個人が特定されない形で分析することを説明した。また、研究終了後、得られたデータや回収したアンケート用紙は調査結

果がまとまった時点で適切に消去・破棄した。

II. 結果

NANDA-I 看護診断の領域 4：活動/休息、類 4：循環/呼吸反応、診断概念：活動耐性低下の成果指標に活動耐性：最適な活動レベルを維持あるいはそのレベルに到着するにおいての、A病棟転棟 1 週間後の目標達成件数は 11 名中 10 名（91%）であった。また、1 週間後の評価は 10 日目が 5 名、11 日目が 3 名、12 日目が 1 名、13 日目が 1 名、14 日目が 1 名で、平均すると 11 日目であった。棟内歩行自立が 5 名（50%）、病棟トイレ歩行自立が 4 名（40%）、車椅子移乗安定が 1 名（10%）であった。

アンケート回収率は 91%で男性 6 名、女性 4 名であった。そのうち 40 代 1 名、50 代 2 名、60 代 4 名、70 代 3 名）であった。

目標の内容は妥当なものでしたかという項目について、「よく思う」7 名（70%）、「非常によく思う」3 名（30%）であった。

目標達成までの期間は（1 週間）は妥当でしたかという項目について、「時々思う」1 名（10%）、「よく思う」5 名（50%）、「非常によく思う」4 名（40%）であった。

目標には自分の意見が反映されたと思いますかという項目については、「時々思う」1 名（10%）、「よく思う」6 名（60%）、「非常によく思う」3 名（30%）であった。

日常生活動作の拡大に向けて看護師は援助したと思いますかという項目について、「よく思う」5 名（50%）、「非常によく思う」5 名（50%）であった。

一緒に目標を立てたことで、自分の意欲が上がったと思いますかという項目について、「たまに思う」1 名（10%）、「よく思う」3 名（30%）、「非常によく思う」6 名（60%）であった。

1. 年齢での比較

目標の内容は妥当なものでしたかという項目について、40 代では、「よく思う」1 名（100%）、50 代では、「よく思う」1 名（50%）、「非常によく思う」1 名（50%）、60 代では、「よく思う」4 名（40%）、70 代では、「よく思う」1 名（33%）、「非常によく思う」2 名（67%）であった。

目標達成までの期間（1 週間）は妥当でしたかという項目について、40 代では、「よく思う」1 名（100%）、50 代では、「よく思う」1 名（100%）、60 代では、「時々思う」1 名（25%）、「よく思う」2 名（50%）、「非常によく思う」1 名（25%）、70 代では、「よく思う」1 名（33%）、「非常によく思う」2 名（67%）であった。

目標には自分の意見が反映されたと思いますかという項目について、40 代では、「よく思う」1 名（100%）、50 代では、「よく思う」1 名（100%）、60 代では、「よく思う」3 名（75%）、「非常によく思う」1 名（25%）、70 代では、「よく思う」1 名（33%）、「非常によく思う」2 名（67%）であった。

日常生活動作の拡大に向けて看護師は援助したと思いますかという項目について、40 代

では、「よく思う」1名(100%)、50代では、「よく思う」1名(100%)、60代では、「よく思う」2名(50%)、「非常によく思う」2名(50%)、70代では、「よく思う」1名(33%)、「非常によく思う」2名(67%)であった。

一緒に目標を立てたことで、自分の意欲が上がったと思いますかという項目について、40代では、「よく思う」1名(100%)、50代では、「よく思う」1名(100%)、60代では、「たまに思う」1名(25%)、「非常によく思う」3名(75%)、70代では、「よく思う」1名(33%)、「非常によく思う」2名(67%)であった。

2. 男女での比較

男性での目標の内容は妥当なものでしたかという項目について、男性では、「よく思う」4名(67%)、「非常によく思う」2名(33%)、女性では、「よく思う」3名(75%)、「非常によく思う」1名(25%)であった。

目標達成までの期間(1週間)は妥当でしたかという項目について、男性では、「時々思う」1名(17%)、「よく思う」2名(33%)、「非常によく思う」3名(50%)、女性では、「よく思う」3名(75%)、「非常によく思う」1名(25%)であった。

目標には自分の意見が反映されたと思いますかという項目について、男性では、「よく思う」4名(67%)、「非常によく思う」2名(33%)、女性では、「時々思う」1名(25%)、「よく思う」2名(50%)、「非常によく思う」1名(25%)であった。

日常生活動作の拡大に向けて看護師は援助したと思いますか項目について、男性では、「よく思う」2名(33%)、「非常によく思う」4名(67%)、女性では、「よく思う」3名(75%)、「非常によく思う」1名(25%)であった。

一緒に目標を立てたことで、自分の意欲が上がったと思いますか項目について、男性では、「たまに思う」1名(17%)、「非常によく思う」5名(83%)、女性では、「よく思う」3名(75%)、「非常によく思う」1名(25%)であった。

3. その他

自由記載には、「目標に対して患者は初めてのことであり、イメージしづらいのではないか。」「アンケートの上の方にも、あなたの目標は〇〇ですと記入してあればよかったですと思います。」「リハビリとは別に自分でその日の空いた時間に(廊下を)1往復~2往復すればよかったです。」と記載があった。

Ⅲ. 考察

1週間後の評価において目標未達成が1件あった。術後不整脈の出現により日常生活動作の拡大が進まなかった患者であった。西村らは、「病棟内歩行獲得を遅延する理由は、頻脈、心不全、精神心理的問題、呼吸器合併症などであった。」²⁾と述べている。富田は、「臥床期間の長期化はさまざまなデコンディショニングを引き起こすとされており、可能な限り早い時期より離床を進めていくことが必要である。」³⁾と述べており、医師に安静度の確認を行い、バイタルサインの変動を見ながら可能な範囲で日常生活動作の拡大を進めていく

ことが必要であると考え。

一緒に目標を立てたことで自分の意欲が上がったと思いますか、というアンケート項目に対する回答は、「よく思う」が 30%、「非常によく思う」が 60%と高く、また目標達成率も 91%であり、達成可能な目標を立案し介入できたことで日常生活動作の拡大につながったと考える。立案する目標については、看護師の経験や患者の状況を客観的に評価し尺度を設定していたが、患者の希望や目標を聞き、共有できる目標とすることがこのような結果に繋がったと考える。今回の研究では、看護師を対象としたアンケートは実施していないが、後藤らは、「目標・目安がある事で精神面での細かいところまで目を向けられ、アドバイスや援助がしやすくなったと思われる。また、患者と共に計画を立案し、深くかかわることで患者が自己決定できるように援助できたことが達成感につながったと思われる。」⁴⁾と述べているため、患者と共に目標を設定することで、患者とのより深い関わりができたのではないかと考える。

自由記載には、「目標に対して患者は初めてのことであり、イメージしづらいのではないか。」「アンケートの上の方にも、あなたの目標は〇〇ですと記入してあればよかったです。」「リハビリとは別に自分でその日の空いた時間に（廊下を）1往復～2往復すればよかったです。」と記載があった。現在、術後の日常生活動作の拡大に向けた目標を設定するため、NANDA-I 看護診断の領域 4：活動/休息、類 4：循環/呼吸反応、診断概念：活動耐性低下の成果指標に活動耐性：最適な活動レベルを維持あるいはそのレベルに到着するを立案し、段階的に目標を達成できるように尺度設定をしており、看護師間での目標の共有はできていた。しかし、自由記載にもあるように患者自身はイメージがしづらく、また患者は看護師が目標を設定し実際に看護介入していることを認識していないことが多い。岩倉らは、「ベッド上で行える自主練習や段階的な目標を記載したリーフレットを作製し部屋に掲示したところ、リハビリテーションに対する目標を明確化でき、自分自身でできる ADL が増えることで自身が回復し、家族や病院スタッフの介助も減り、自立心を高めることができた。」⁵⁾と、言っており、目標や計画を視覚的にアプローチした方がよかったと考える。今後の課題として、患者と看護師だけでなく医師や理学療法士など他職種間と連携し、目標や計画を作成することが望ましい。

このように患者と共に目標を設定し、日常生活動作の拡大に向けて介入を行い、1週間後に評価するという方法は有効であったと言える。このことから、同様な症例の患者には介入を継続して行っていく必要があると考える。また、同様な症例だけではなく異なる症例の患者においても共に目標を設定し日常生活動作の拡大に向けて介入することで、有効な結果が出るのではないかと考える。そのため、このような介入方法が継続できるように、チーム内での勉強会や伝達講習などを行い推進することが望ましいと考える。また、今回のアンケートを行った人数が少なかったため、男女差や年代別における差を見ることができなかったが、人数が増加すれば男女における個別の介入方法や、身体機能や回復機能を踏まえた年代別での介入方法が検討できるのではないかと考える。

IV. まとめ

1. A 病棟術後の患者を対象とした場合でも目標達成することができたため、有効な介入であったと考える。
2. 患者と共に目標を設定することで患者の意欲も向上し、術後平均 11 日目で目標の日常生活動作に達することができた。
3. 今回の介入が有効であったことから、今後も同様な症例の患者だけでなく様々な症例の患者にも行っていく必要がある。そのためにも今回の介入方法を A 病棟内で推進していく。

研究の限界

今回のアンケートを行った人数が少なく、年齢や性別による差を見ることができなかった。また、元々の日常生活動作にも差があるため、対象人数が増加すれば正確な有意差が得られたと考える。

引用・参考文献

- 1)、3) 富田裕子：心臓大血管手術後の患者と看護計画を共有して一患者の内なる力を強めることの大切さ一、HEART nursing (0914-2819) 21 巻 6 号、648-654、2008
- 2) 西村真人、他：冠動脈バイパス術後症例における歩行獲得期間の年代別比較、日本心臓リハビリテーション学会誌、11 巻 1 号、83-85、2006
- 4) 後藤優子、他：患者参画型看護を試みて、秋田県農村医学会 (0002-368X)、50 巻 1 号、12-13、2004
- 5) 岩倉将、宮本和幸、福原正貴：術後呼吸器合併症を呈した高齢左開胸再冠動脈バイパス手術症例へのリハビリテーションの経験、日本心臓リハビリテーション学会誌、16 巻 2 号、234-237、2011

アンケート

開胸術後、大血管術後患者の ADL 拡大に向けた目標を共に設定して

現在、病棟 5 階 B (以下 5B と略す) では術後の患者さんが集中治療室から 5B へ転棟してきた際に、術後の早期離床に向けた患者さんの目標を看護師が設定しています。そして、その目標を達成できるように看護介入を行っています。今回の看護研究では患者さんの意向を聞きながら共に計画を立て、目標達成を目指したいと考えています。そうすることにより、どのような効果が得られるのかを知りたく、アンケートをさせて頂きたいと考えておりますので、よろしくお願い致します。

当てはまる数字に○をしてください。

<年齢>

1. 20代 2. 30代 3. 40代 4. 50代 5. 60代 6. 70代 7. 80代 8. 90代

<性別>

1. 男性 2. 女性

	非常に よく思う	よく思う	時々思 う	たまに 思う	思わない
目標の内容は妥当なものでしたか	1	2	3	4	5
目標達成までの期間(1週間)は妥当でしたか	1	2	3	4	5
目標には自分の意見が反映されたと思いますか	1	2	3	4	5
日常生活動作の拡大に向けて看護師は援助したと思いますか	1	2	3	4	5
一緒に目標を立てたことで、自分の意欲が上がったと思いますか	1	2	3	4	5

自由記載：

目標を共に設定したことについて、もう少し工夫すればよいと思うことなどありましたか。

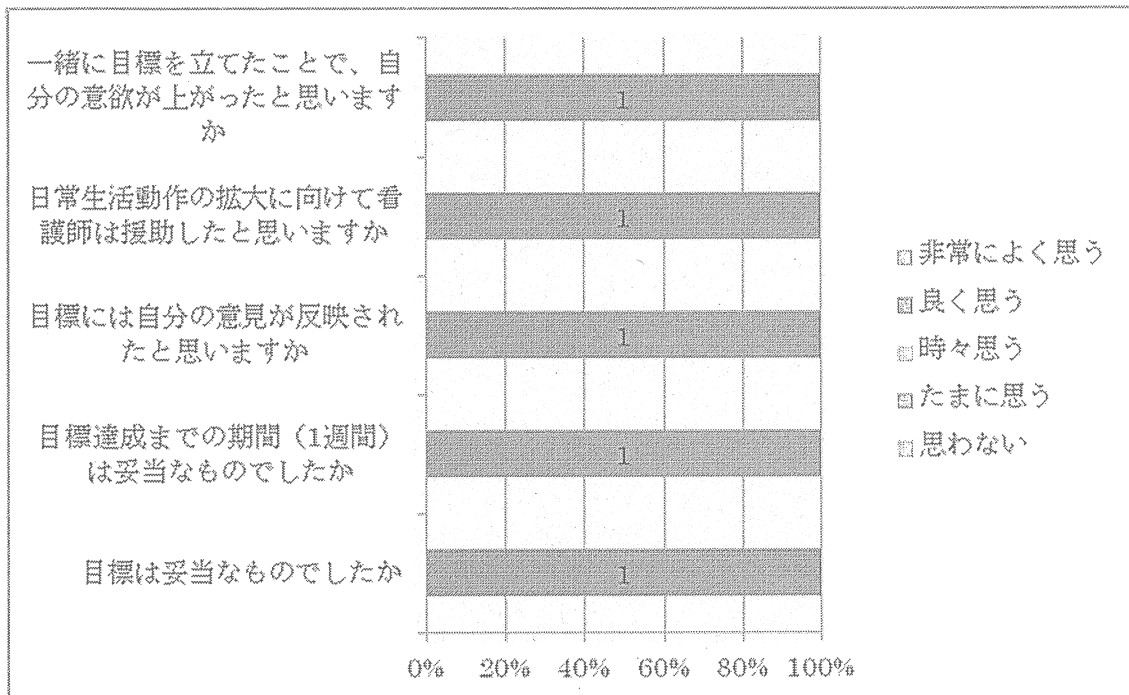


図1 各アンケートに対する40代の割合

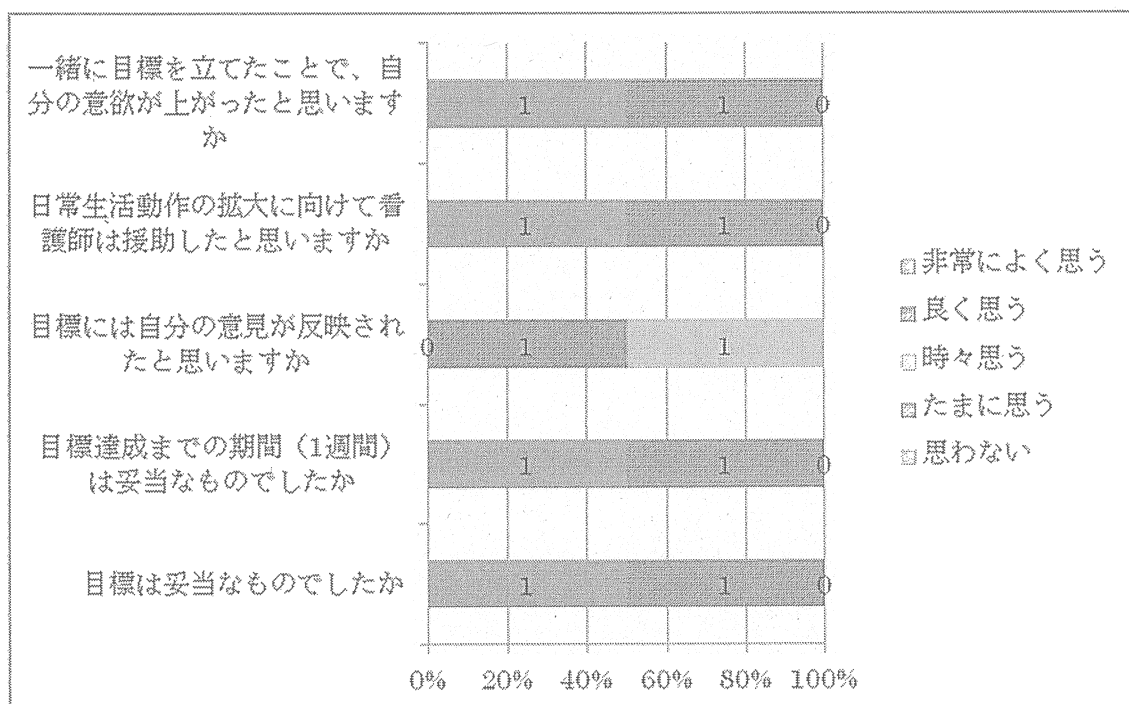


図2 各アンケートに対する50代の割合

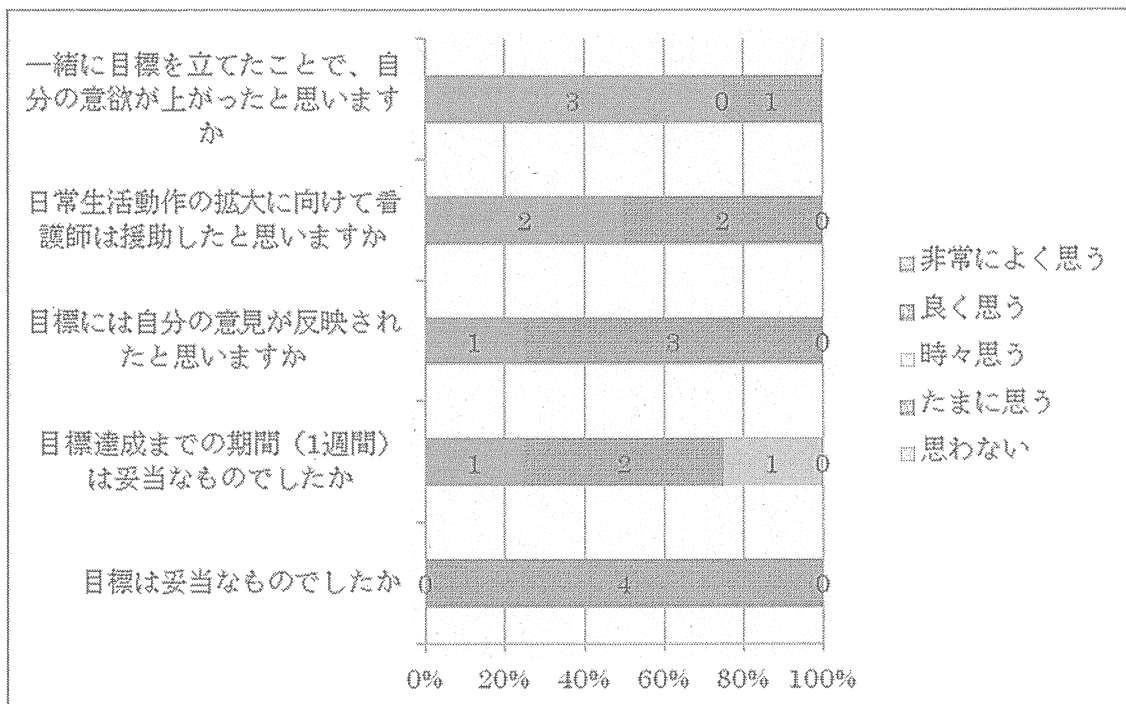


図3 各アンケートにおける60代の割合

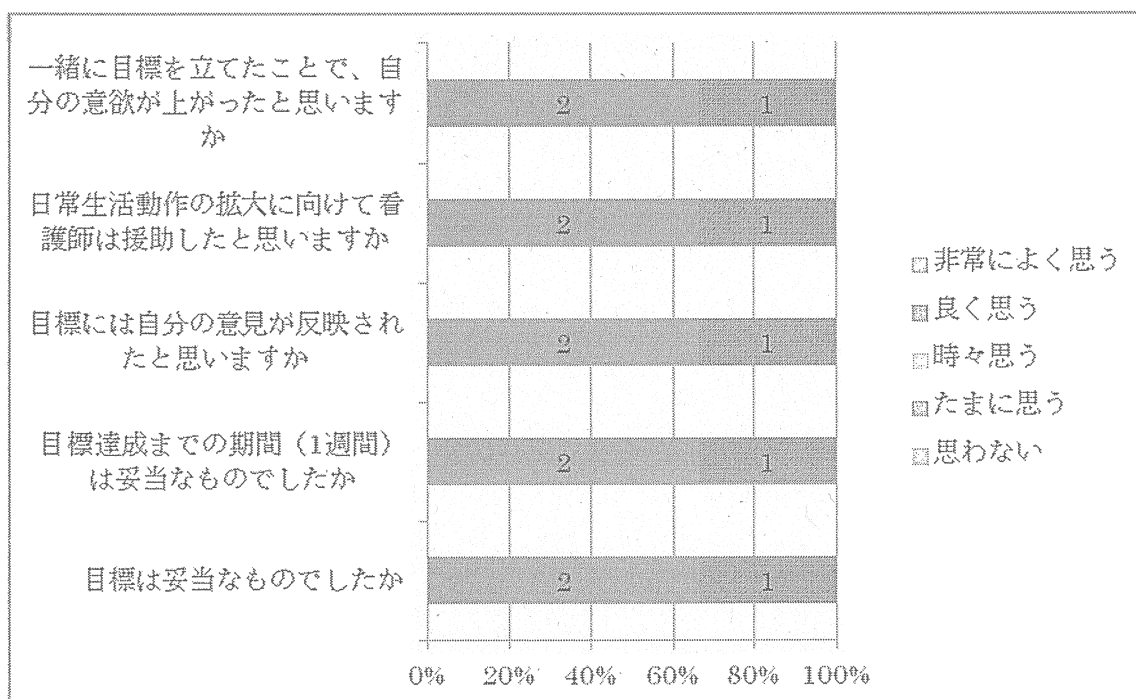


図4 各アンケートにおける70代の割合

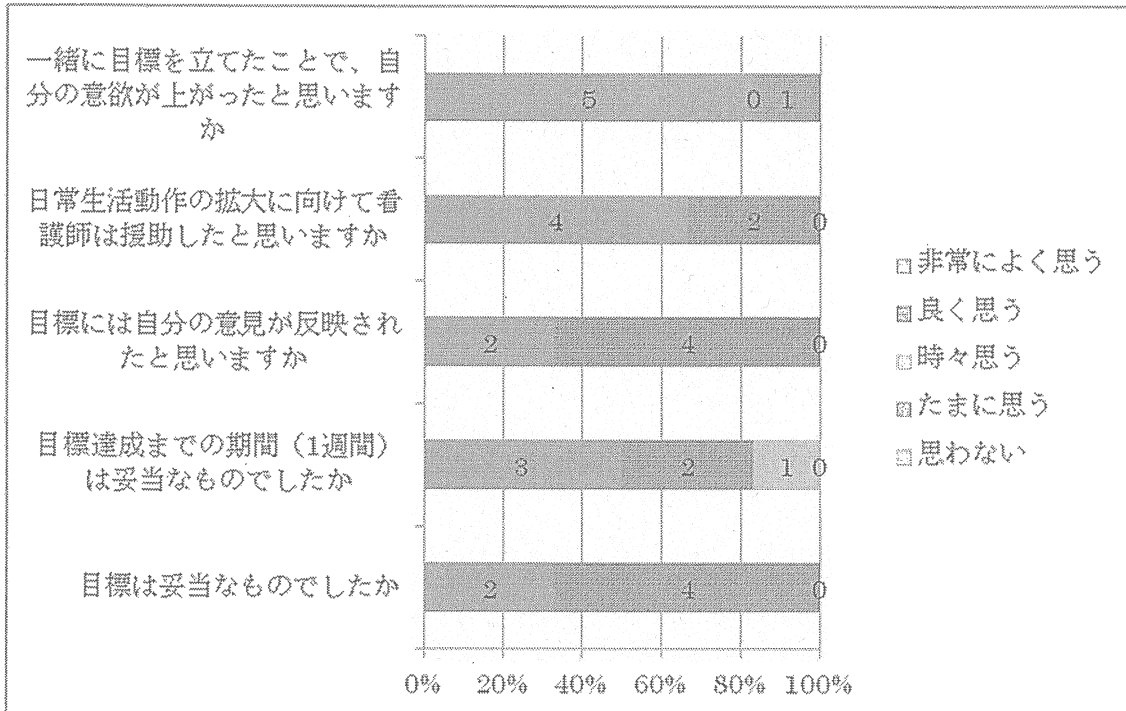


図5 各アンケートにおける男性の割合

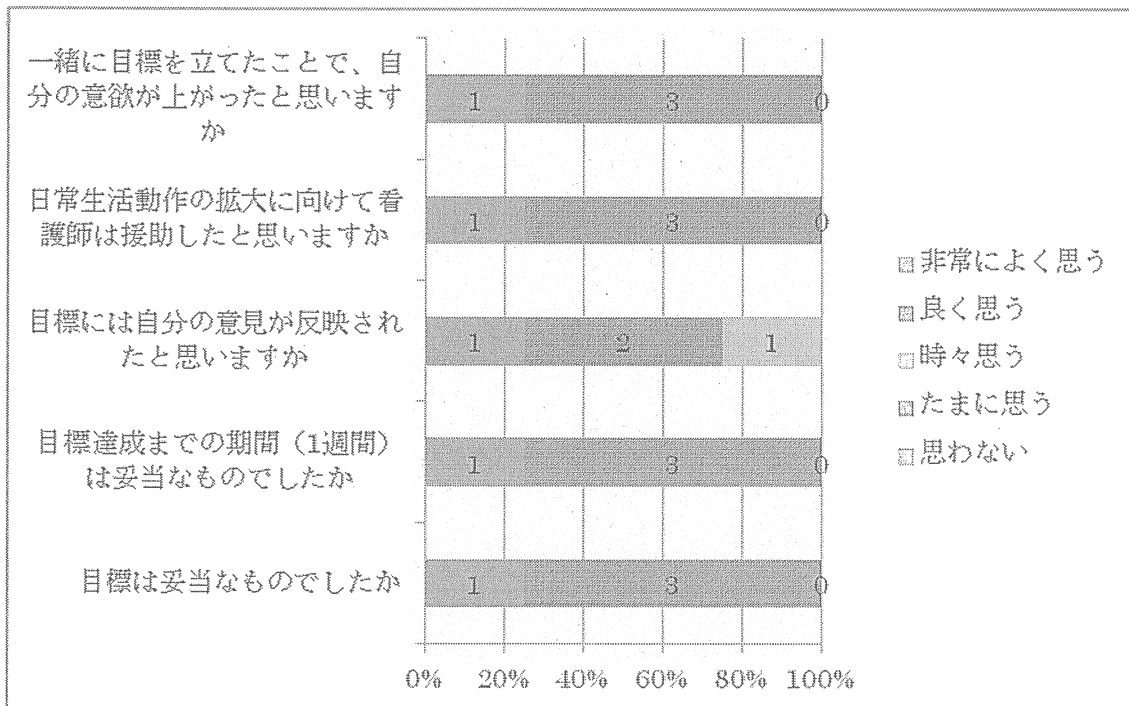


図6 各アンケートにおける女性の割合